

2017年に改定されたガイドライン一覧

1) 小児肥満症診療ガイドライン 2017

(内 容)

小児肥満症診療ガイドラインの対象

6歳以上18歳未満(6歳未満の幼児は別対象)

肥満に起因、関連する医学的異常を合併するか、その合併が予測され、医学的に肥満の軽減が必要な状態を疾患単位として扱う。肥満の判定は成人にはBMIを使うが、BMIの絶対値は年齢・身長に伴い増加するため小児には使わず、肥満度 $\geq 20\%$ か体脂肪率の有意増加とする。また、生活習慣病は胎児・幼児期に始まるというDOHaD理論や、胎児の低栄養・ストレス・母胎喫煙などの環境因子が非感染性の慢性疾患 のリスクであるとするエビジェネティクス の概念なども「発達障害・染色体異常を伴う肥満小児」「小児肥満・小児肥満症の予防医学」などの章でまとめられている。

書 籍

小児肥満症診療ガイドライン 2017

発行日2017年5月15日

編集: 日本肥満学会

発行所: ライフサイエンス出版株式会社

2) 動脈硬化性疾患予防ガイドライン2017

日本動脈硬化学会ホームページ

<http://www.j-athero.org/>

新ガイドラインのポイントは、吹田研究に基づく絶対リスクの導入、高リスク病態としての高尿酸血症、睡眠時無呼吸症候群などの追加、二次予防における高リスク病態での厳格なLDLコレステロール管理の提言、家族性高コレステロール血症(FH)の記載の拡充、エビデンスレベルと推奨レベルの標記が挙げられている。食事療法に関してはクリニカルクエスチョンCQの形でエビデンスレベル、推奨レベルが明記されている。一方、糖尿病など高リスク病態への対応なども明記されており、管理栄養士の栄養指導にはなくてはならない1冊である。

書 籍

動脈硬化性疾患予防ガイドライン2017

発行日: 初版 2017年6月30日

発 行: 一般社団法人日本動脈硬化学会

制 作: 株式会社 ナナオ企画

定 価: 本体3,000円+税

臨床栄養Vol.131. No.6

動脈硬化性疾患予防ガイドライン2017年版をひも解く

3) サルコペニア診療ガイドライン2017

国立長寿医療研究センター ホームページ内

<http://www.ncgg.go.jp/cgss/news/20180117.html>

2016年に国際疾病分類に登録され、世界的に「疾患」として注目が集まる「サルコペニア」。サルコペニアは高齢者にみられる骨格筋量の低下と筋力もしくは身体機能（歩行速度など）の低下により定義される。サルコペニアの原因は加齢が最も重要な要因であるが、活動不足、疾患（代謝疾患、消耗性疾患など）、栄養不足などが危険因子である。また、生活習慣病（非消耗性疾患）においては、2型糖尿病やメタボリックシンドロームで有病率が高いことも判明した。サルコペニアの定義や診断、疫学、予防、治療を考える上で管理栄養士にも欠かせない一冊である。

4) 認知症疾患診療ガイドライン 2017

日本神経治療学会ホームページ内

https://www.isnt.gr.jp/Public_comment/img/jobun.pdf

このガイドラインでは総論的な事項として、定義、疫学、症候、評価尺度、診断、検査、非薬物・薬物治療、せん妄・合併症への対応、危険因子、予防、軽度認知障害、重症度と重症度別対応、介護、社会資源、地域連携、倫理・法律的諸問題が取りあげられている。前回のガイドライン発行後の評価に関するアンケートにおいて、ビタミン欠乏などによる内科的疾患についても取り上げてほしいとの意見もあったため、今回は、ビタミン欠乏症、甲状腺機能低下症、神経梅毒、肝性脳症、特発性正常圧水頭症（iNPH）を取り上げられている。他にも高血圧や糖尿病などの生活習慣病の治療が予防因子となるかなどが検証されている。

臨床栄養Vol 132 No1 掲載

5) 「高齢者脂質異常症診療ガイドライン2017」

日本老年医学会 ホームページ内

http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/tool/pdf/guideline2017_03.pdf

すでに糖尿病、高血圧については高齢者のガイドラインが発刊されているが、脂質異常症について今回発刊の運びとなった。高齢者脂質異常症の診療については、日本動脈硬化学会の動脈硬化性疾患予防ガイドライン2017年版にも述べられているが、ガイドラインにはない視点をも加えてクリニカルクエスチョン（CQ）を設定してある。在宅医療現場での治療や エンドオブライフにおける治療などエビデンスが少ない領域もあるが、今後のエビデンスの集積に期待されている。